

航 空

あの日から五十年

山口県 三田 全 二

経ってみれば早いものだ。

私は昭和十七年七月十六日、十八歳の時、現役志願で滋賀県八日市の第八航空教育隊に入隊した。当日は夏によく晴れた爽に暑い日であった。私の場合は、どうせ誰でも二十歳になれば軍隊に入るのなら、二年早く入って、二年早く帰ればよいではないかという、ごく単純な気持ちであった。しかし「志願をしてくる馬鹿もある」の歌の文句のとおり、入隊の汽車の中で「この中に、わざわざ志願をして来た人もいる」との

ひそひそ話もかなり耳にし、多少は肩身のせまい思いをしたのも事実であった。

一期の検閲も終わった十一月の中旬、それぞれ外地部隊や内地部隊への転属の発表があり、私は幸か不幸か数人の戦友とともに静岡県掛川（磐田）の第一航空情報連隊（中部第二九部隊）に転属だ。

外地派遣

昭和二十年一月中旬ごろ中支派遣軍の具体案が作られ、この期を逃したらおそらく軍人としての外地派遣は、まず不可能だと考え、部隊編成の発表前に外地派遣を志願する。この編成にはうちの部隊からは、確か航空観測一個小隊だったと思う。

これには、当時の私には都合よく、小隊の中に自動車関係の下士官が一名含まれていたため晴れて外地行

きとなった。派遣のための準備作業も終わり、いよいよ一月下旬原隊を出発して磐田駅に向かう。このときの気持ちは、ある程度の緊張と希望に溢れ、体の内部よりわくわくするような大きな喜びであった。これは私が独身であったためかも知れない。

駅に到着、汽車に乗り込んだが、この時の見送り状況はほとんど記憶にない。名古屋、大阪、広島を過ぎ、早朝四時頃、確か山口県の三田尻駅（郷里）を通過する時に、一瞬父、母、弟を思い出し、胸の内では別れを告げる。そして、関門トンネルを経て終点大里駅に無事に到着する。六時前のためほとんど人を見かけなかった。

駅前に整列をし、小休止ののち背囊を背に銃をかつぎ、行進、約二時間弱で門司港に着き宿舎に入る。明日の乗船まで自由時間のため、すぐ海側の岸壁に出てみると、乗船する船は積荷も真っ最中であつた。

いざ外地へ

一夜明ければ乗船だ。装備を整えて順次海岸へ向かい、乗船口より約二三百メートルのところ乗船を

待つ。実は、昨夜数発の爆弾が岸壁倉庫の付近に落ち、大した被害はなかったが、出発直前の敵の大歓迎をうけ肝を冷やした。

約三時間ほどだらだら進み、やっとタラップに足がつく。これより船室に着くまでさらに一時間以上もかかり自分の席にたどり着く。足を伸ばす空間もなく、ただ我慢だ。やがて、すべて積み込みを終了、夕方少し前に静かに岸壁を離れる。見送り人としてさらになしだ。

さらば内地よ

夕闇せまる頃までは海もなぎ、甲板上は最後の内地の風景をみるために人また人の状態であつたが、外海にでると波も出、風も強さを増して船も揺れ出し、各々自分の席に戻る。手足も十分に伸ばされず、狭い通路は忽ちふさがれて通行も困難なる状態になる。

真夜中に数人の戦友と甲板に出る。さすがに玄界灘だ。波も風もつよく船も揺れがひどい。なにしろ三千数百トンの船に相当な機材と、二千数百人の人が乗っているのだ。

そのときにふと、もし十数分で船が沈んだら恐らく助かる人はまずなからうと思った。小便を済ませて席に戻る間、人の頭や、手足などを数回踏み、怒鳴られる。また救命具は竹を組み合わせた物で、チャッカリ組は穴を明けて、その中に小便をする人もいたようだなにしる通路も人でふさがれているため、便所へ行くのは一仕事である。船倉も数段に仕切られており、私達は下の席のために釜山に着くまで、よく上の階より小便の雨が降ったものだ。

船のガブリのためほとんど食欲もなく、遂に一回も船食を食べなかった。かくて、やっと二昼夜の航海の後釜山に着く。この間、潜水艦の魚雷攻撃も受け、船長の沈着な操船と船舶砲兵の砲撃により難をまぬかれる。不思議なものであれほど苦しんだ船酔いも上陸したらピタッと直った。

釜山に上陸後、最終的な部隊編成、宿舎の割当て、中支に向かつての乗車準備や食事の手配などの諸準備におわれた。折をみての外出で時を過ごし、二月五日乗車、一路北上する。京城に停車をした際に日の丸の

旗を持ち手を振って歓迎してくれた小、中学生に感激する。

六日早朝に鴨緑江を越え満州に入る。乗車前は客車であるため、これは案に行けるぞと内心ほっとしたが、次第に通路も占有される。しかし、生まれて初めての外地で外の風景を熱心に見ていた。

残念ながら鴨緑江の鉄橋を渡るときは夢の中であった。さすがに満州は広い。奉天の南側を通り、満支国境の山海関に入る。このときに万里の長城の一部を遠望する。確か二月七日の昼頃北京に到着する。北京を立ち天津へ、ここから一路南下し、歌の文句で有名な徐州へ着く。

いよいよ中支だが、ここまでの風景は内地とあまり変わらないように思えた。田畑の区切りが日本より少し広い程度で線路の両側に電流鉄条網があるのが大きな違いではあった。しかし汽車の中には客車のために、思い切って手足も伸ばせず、数日も汽車に乗るには貨車の方がよいと思った。皆ぐったりだ。

約一週間の長旅を終えて、やっと南京の対岸に着き、

船で揚子江を渡り南京城内へ入る。さすがに城壁は高く、まず目についたのが「仁」「義」「礼」「智」「信」の字を刻んだ石碑だ。孫文の書だと聞く。南京城内で約一週間過ごす。なにしろ、各人は携帯毛布一枚のために土間にざこ寝だ。私達の小隊編成も終わり一路目的地へ向け出発だ。

今度は、貨車のために大変に案に過ぐす。上海を過ぎ目的地の浙江省の臨平（杭州の二つ手前の駅）に着く。釜山をでてより約十五日を要した。

所属の第九七七部隊は、南京に連隊本部を置き、中支一帯に小隊、分隊単位で展開をしており、小人数のためにのびのびとしていた。臨平に着いた私達は、当地の歩兵中隊の隊舎の一部に仮住まいだ。この間に、よく町に出たが当時、内地ではまず見かけない、「まんじゅう」等の甘味物もあり、物資はかなり店頭にあつたようだ。しかし、反面腹の異状にふくらんだ所謂栄養失調の人々もかなり目にしたものだ。

臨平での軍務も約二か月で慈谿（軍波の二つ手前の駅）への転属命令を受け、杭州まで鉄道、慈谿までは

自動車で行く。慈谿へ着く。ここでの軍務は終戦までつづく。

兵役に服したときの家族の状況

私が、軍隊に入った時は、一番に気楽な状態にあつた。父は五十四歳で市役所勤務、母は四十四歳で家で小さな文具店を営み、弟は十一歳で小学生、そして兄は二十歳で昨年別府で私と一緒に徴兵検査を受け、二か月後に上海の貿易会社に引き続いて勤務中だった。

ただ私は、入隊二か月前にそれまで三年勤めていた日本国有鉄道を退職していた。勿論在職中は、給料は多少は貯金もしていたが、家に出すことはなく自由に使っていた。従って、入隊しても家計は支障はなく、兵役中も送金などしたこともなかった。

兵役中も家族構成に変動なし

また、昭和十七年七月よりの兵役中も、私の場合は運良くみな元気であった。この点は、今思えば神仏に深く感謝の念が湧く。

兵役に服してからの軍務

人生で最も記憶に残るのは戦闘労苦、一番に苦勞を

したときではなからうか。私は今でも思い出すのは、五十年前に入隊をした滋賀県の八日市だ。いよいよ軍服に着替えるときに、それまで着たこともない下着の上下、その上に軍服の上下、さらに靴下、上靴の使用、演習時の編上靴など、猛暑の中これにはおそれいった。この時分、地方ではランニング一枚だ。しかし、時とともに馴れて何故必要かを身をもって体験する。暑い時の行軍には下着がなかったら汗の吸収は軍服じかとなり、むしろ難行軍になる。

また、毎日の兵器の手入れは当然としても、恐れ入ったのは洗濯だ。まして、隣に古参兵がいればその人の洗濯も初年兵の仕事だ。朝の演習前のひと時に素早く洗濯を済ませて物干し場に干す。これもしばらくの間苦労をする。軍隊には階級があるが、なんとと言っても初年兵にとって一番苦手は班内の古参兵だ。反面、地方にない面白いところでもある。私の隊では大体半年ごとに新しい人が入り、それだけ自分の軍歴が古くなることだ。当然ある程度の余裕が出る。

特徴的な軍務

入隊時、私は衛生班にいたが、これは早く本科に変わらなければこのままになると思い、その際にラッパ班なら変更可能のために、希望を述べて変わる。しかし、航空兵として入隊しながら情けないとの声が班内に起こり、遂に中隊長の訓示を受ける。「お前達の気持ちは分からぬこともないが、どの部署も皆必要だからしっかりやってくれ」と。この気持ちを引き締めたのは訓練だ。私は地方にいるときにラッパ等手にしたこともなかったが、古参兵の猛烈な指導のもと、十日程度で音が出だし、一か月もすると一通りの音が出るようになった。その間、毎日早駆けの連続だ。早駆け吹く、早駆け吹くの連続で次第に上達をする。

かくて、一期の検閲までに一般教練とともにほぼ習得をする。ラッパ手にとって最も得意な時は起床ラッパだ。磐田(静岡県)の第一航空情報連隊にいるときに週に一回程度衛兵についたときに、ラッパ一つで約三千人の隊員が一斉に起床をする。見事なものだ。どんな号令でも一人の人がこれだけの人を動かすことは出来ぬ。馴れに従って、定位置につき各中隊の不寝番

の気をひきつつ、ゆっくりとラッパを口に持って行くようになる。この連隊で下士候の志願をし自動車にかわる。

三か月後に三重県の鈴鹿の第一航空軍教育隊に入り、午前中学科、午後演習の教育を受ける。南はフィリピン、北は千島までの約六十人の同年兵だ。私も本格的に自動車のハンドルを握ったのは伊勢神宮の外宮より内宮までで、初運転として実に感謝すべき場所であった。班内も同年兵のみで余裕をもって教育、訓練をうける。

空襲がはじまる

かくて十か月の教育も終わって原隊の静岡県磐田に復帰する。ここまでは内地勤務のために、まだ実弾の経験はなく、復帰後も自動車関係の任につく。しかし、確か昭和十九年の八月頃よりガソリンの使用が次第にきつくなる。私は燃料の直接掛りとして、それまで月に二万リットル位の使用実績が六百リットルに削減され、トラックの使用が極端に圧縮をされる。緊急時には、ゴムパイプで車より車へ移し替えることもよく

あった。

八月の下旬、初めて空高く飛ぶB 29を見る。九月に入ると毎週一回は八十機前後のB 29が富士山を目ざして進み、ここより二つに別れて爆撃コースに入っていた。

十月に入ると当地も爆撃のヒューという落下音を聞くようになる。が、ほとんどの隊員が初体験のために初めはとまどったが、次第に処遇に馴れてきた。しかし、馴れても緊張そのものだ、なにしろ命がかかってい。私の隊にも日頃「俺はラバウルで度々空襲を体験しているので全然コワくない」と常日頃豪語していた兵長が、いざ空襲になると営内のタコツボに移動、移動また全速移動だ。度重なるうちに他の戦友からそれそこに爆弾が、いやあちらに落ちるぞと、よくからかわれたものだ。

昭和十九年も十一月、十二月になると二三日おきに上空を通過し、それを迎撃する友軍機との間に空中戦も激しさを増し、身軽になるためか、敵機の爆弾投下の回数も増してきた。私も数機の被弾したB 29をみ

たが、被弾して黒煙をはくまでに十分以上かかり、黒煙をはくと一気に墜落するが、よくそれまでに海上へ逃れていった。

反面、友軍機は黒煙をはきながらも必ず民家をよけながら、川へ落ちて行った。特に激しさを加えたのは艦載機による浜松空襲だ。私達の兵舎の上空をかすめながら浜松へと爆撃や銃撃を加え、数十機の友軍機が撃破された。また、空中待避中の航空機も目の前で、数機撃墜される。度重なる空襲による家屋の倒壊、爆死者や負傷者への救護作業なども頻度をまし、夜間の焼夷弾の不発弾の処理など次第に様子が切迫してくる。

軍務、戦闘への心の支え

私は兵科が航空のために、また、中支に終戦まで半年いたために、内地での数十度の空襲や、中支でのP51数機による空襲以外に、第一線で銃弾を交えたことはない。また、軍務は中支でも小隊、分隊単位の展開のために比較的に恵まれていた。従って衣食住の欠乏も終戦まで未経験だ。

終 戦

終戦を慈谿（寧波の近く）で迎え、その年の八月下旬頃、隊の終戦処理を終えて上海に向け出発し、二三日で上海の捕虜収容所に入る。この間割合案に移動をするが、この時期私は虫歯が痛みだし仲間と治療に出掛ける。しかし、なにしろ数千人の兵隊の中で歯科医は一人のために遂に断念する。

おかげで食事也十分に噛むことも出来ず、昭和二十一年一月十日頃の上海出港まで痛み、苦しみの連続で、食事の量も捕虜生活中はそれまでの半分程度であった。

復 員

上海港からはLSTに乗り佐世保に向かう。乗船は四列縦隊で三つの入り口より乗る。約二千人の兵隊が約三十分弱で乗り終える。手足は十分伸ばせないが通路は余裕をもっていた。

要所は銃剣を持った米軍の監視だ。途中波はひどかったが、三日後佐世保に到着する。幸い三月に復員した兄も加え全家族も健在であった。生活は父は市役所、私は土工等をして一応最低線を維持した。食生活もヤミ米を求めての最低の状態であった。

復員後一年半で会社に就職した。戦後のあの飢餓状態を脱出できたのは米国のトウモロコシや小麦のおかげだ。不幸にして兄は戦地での無理が原因か、復員後一年半で亡くなる。

東金飛行場大隊

労苦体験記

福島県 及川 春 幸

「皮を切らして肉を切れ、肉を切らして骨を切れ、少しでも相手に力技で勝り生き残ってこそ国の為になれると、頭に置いて鍛錬に励め」とは、原隊の満州独立第十一国境守備隊（関東軍直屬で、常時でも戦地同様の勤務部隊）通称号満州第八八部隊、歩兵第二中隊長猪足中尉（広島県出身）の教訓であった。

中隊長が何度も体験した中国内での白兵戦の体験談中で最も感じた例として、日本と中国の中隊長同志が、白兵乱戦中の出来事の一駒がある。たまたま一騎討と

なり剣で勝負がつかず組み打ちとなった。残念にも僅かな力の差で我が方の中隊長が組み伏せられ、あわや短剣で刺されそうになった。その寸前、隊長付番番がこれを近くで見、自分の相手の敵を捨てて敵の隊長の背中から銃剣で突き刺し隊長の難を救ったという。

当時、猪足中隊長は見習士官だったようですが、日本刀の刃はポロポロにこぼれてしまふ「人を切るのは刀で切るのではない、力で切るのだ」と、この話は現実味のある教訓として納得出来た。それにしても、常の心身の鍛錬こそが最も大事な要素であることを改めて覚悟をしたものです。

私は昭和十九年八月十五日、関東軍の演習の名のもとに観月台から、暗夜トラックで地獄に引きずり込まれるような感じのする中、国境付近を出発、次に貨物列車で四、五日かかり着いた所が、ハルピンの遙か北西、嫩江（ノンコウ）飛行場、第四百一飛行場大隊でありました。

私共は、略称関特演第六次か七次の補充兵であつたらうか。国境各部隊よりの選抜兵達と一緒に、遙か国